

千刈狸の呟き

～折茂武彦にみる“GRIT (やり抜く力)”～

縦 縞 狸

折茂武彦、というバスケットボール選手をご存知だろうか？

秋田ノーザンハピネッツの選手や田臥勇太選手など、秋田にゆかりがあり、脚光を浴びているバスケットボール選手ならご存知の方も多いただろう。実は折茂選手、プロバスケットボールリーグ（Bリーグ）のレバンガ北海道に所属する1970年生まれの46歳現役選手なのだ。今シーズンも、秋田ノーザンハピネッツの所属するB1リーグで熱戦を繰り広げている。昨年11月、国内トップリーグ日本人選手初の通算9000得点を達成した。「立っただけでも褒めて欲しい」と思いながら、月2回のバスケットを「たしなんで」いる46歳の縦縞狸にとって、折茂選手は20年以上スーパースターであった。

折茂選手を代表するプレーは、3ポイントシュートである。アジアNo.1シューターと言われたプレーには、マイケル・ジョーダンやレブロン・ジェームスのような華麗で超人的プレーは少ない。空いたスペースに走りこんでシュート、スクリーンプレー（相手選手の前に幕のように立ちふさがり、相手の動きを妨害するプレー）でノーマークをつくってシュート、1回のドリブルだけで相手とのズレを作ってシュート、の繰り返しで次々とゴールを決めていくさまは、今でいう「神シューター」といったところだろうか。これらのシンプルなのに守りにくいシュートパターンを武器に、20年にわたって9000得点を積み上げたのである。

昨年、米国で話題となった流行語の一つに“GRIT (グリット)”という言葉がある。辞書に載っている「気概、気骨、勇気、根性」とは違い、「やり抜く力」と訳されている新しい言葉だ。グリットは、人のあらゆる成功を決める「究極の能力」であり、IQなどの持って生まれた才能は重要ではない、としている。この理論は、ペンシルベニア大学のアジェンダ・ダックワース教授から発信されたものであり、昨年発刊された『やり抜く力 GRIT』は世界的ベストセラーとなった。グリットの特徴は、興味、練習、目的、希望とされており、一時的で集中的な興味ではダメで、永久に興味を持ち続けること、さらに上達するために、失敗を糧にしてさらに練習をすること、マンネリや逆境に打ち勝てるような、高い目的を設定し、それに近づくことによって得られる意義を理解することが重要と説明している。

折茂選手のグリットについて考えてみる。小さ

なころから、「究極の3点シューターになる」ことを目標に練習に励んでいたことだろう。しかし、190cm、77kgという、バスケットボールの世界では恵まれたとは言い難い体格。毎日毎日、せせせとシュート練習を繰り返し、気づくと億単位の3ポイントシュートを打っていたことだろう。プロとして生き抜くために、試行錯誤の末に編み出した「必殺技」といっても過言ではない。傍から見れば、「完璧」といえるシューターは、「自分に満足していない」ことに満足し、「もっと上達できるはずだ」とさらに練習を繰り返している。

振り返って、縦縞狸自身について検討する。「一つの道を究める」という情熱を持ち続けられず、さまざまな「道」に興味分散して一時的に夢中になることが多い。練習はするものの、集中的に練習するだけで永続的に興味を持ち続けられない。結果、成功するどころか、「すべての道で平均点」というだらけた位置に落ち込んで現在に至る。グリットを身に付けるどころか、対極にあるんじゃないかと思う「屁タレ力」のみが増長した46歳になってしまった。でも、「屁タレ力」を充填している縦縞狸、それほど嫌いではない。

というのは、医師としての『成功』や『目標』はヒトや年齢によって変わるものと思うからだ。研修医時代のように24時間働く猛烈先生であり続けても、「いつまでその仕事の流儀、続けるつもり？」と考えた時、加齢に伴う体調の変化や、家庭を含めた社会情勢の変化を勘案すると、無理なことは容易にわかる。手術を極める、在宅医療に没頭する、予防医学のための啓蒙活動に力を入れるなど、それぞれの年代に合わせた興味や目標があってしかるべき。他人が評価する『成功』は不要であり、自己満足の『成功』で十分であろう。

ただ、狸とはいえ医師である。目の前の患狸は一人として同じ患狸はいない。毎回、診察のたびに何らかの新しい発見があり、治療方針を微調整して治療結果を評価する。このことだけをグリットとして持ち続けられれば、自他ともに認める『成功』となるのだろう。

ちなみに、折茂選手は小学生のころは野球に没頭しており、将来のプロ野球選手を夢見ていた。しかし、中学校入学に際し、あっさり野球をあきらめる。理由は「中学校の野球部では坊主頭は強制」と聞いたから。「やり抜く力」あふれるスーパースターも、「屁タレ力」満載の少年時代だったようだ。